

都市と交通まとめレポート

チーム名 1/2 無免許 C1251308 佐々木大和

A) 他のチームの発表を聞いて、自チームにはなかった参考になった点

他のチームの発表を聞いて、交通問題を単に「移動手段が足りない」という視点だけで捉えるのではなく、都市の構造や人々の生活の在り方と結びつけて考えている点が特に参考になった。私のチームでは、主に地方都市におけるバスやタクシーの運転手不足といった交通を供給する側の課題に注目していたが、発表したチームでは、交通を利用する人の行動や、都市の中心部と郊外の関係など、より広い視点から問題が考えられていた。特に印象に残ったのは、「移動手段を増やすこと」だけでなく、「そもそも移動の必要性を減らす」という考え方である。生活に必要な施設を一か所にまとめ、徒歩や自転車でも生活が成り立つ範囲を広げることで、自動車に頼りすぎない都市を目指すという発想は、私たちのチームにはなかった視点だった。これは発表で紹介されていた「歩いて暮らせるコンパクトなまちづくり」という考え方と深く結びついていると感じる。また、バスだけに頼るのではなく、地域の人口規模や需要に応じて、路線バス、デマンド交通、徒歩などを組み合わせるといった提案もとても導入しやすくよい提案だと感じた。さらに、高齢者や学生など、立場の違う利用者ごとに交通の課題を整理していた点も分かりやすく、交通問題を考える際の整理方法としてすごく参考になった。

B) 自分たちのチームの提案を踏まえた上での総合的な解決策について

A で述べた他チームの発表を踏まえて、私たちのチーム「1/2 無免許」の考えは、地方都市の交通問題の根本には、公共交通を支える人手と仕組みの弱さがあると考えられることだと思う。私たちは、地方都市でバスやタクシーの利便性が低下している原因として、運転手の人手不足に注目してきた。地方では、利用者の減少により交通事業者の経営が厳しくなり、賃金を上げる余裕がなくなる。その結果、労働条件が厳しいというイメージが広まり、若年層が運転手の仕事を選びにくくなるという悪循環が生まれている。また、二種免許が必要であることも、参入のハードルを高くしている。このような状況では、民間事業者だけに公共交通の維持を任せることには限界があると思う。そこで私たちは、公共交通を「利益を生み出す事業」ではなく、「生活インフラ」として捉え直す必要があると考えた。具体的な解決策として、運転手の一部を公務化し、会計年度任用職員として行政が雇用するという提案を行った。これにより、収入や雇用の安定が期待でき、不採算になりやすい時間帯や、高齢者の通院、学生の通学といった生活に欠かせない路線を維持しやすくなると考えられる。さらに、発表のグループで示されていた都市構造の視点を参考にし、それを取り入れることで、この提案はより効果的なものになると感じた。行政が主体的に交通政策に関わるのであれば、市役所内に交通課のような専門的な部署を設置し、バス、タクシー、デマンド交通をまとめて管理することが重要である。これにより、交通の役割を都市全体の計画と結びつけ、無駄の少ない交通体系を構築できると考えられる。ま

た、他チームの発表で学んだ「移動の必要性を減らす」という視点を踏まえると、公共交通の維持と同時に、都市の在り方そのものを見直すことも必要だと思った。公共施設や商業施設、医療機関などを交通の便が良い場所に集めることで、高齢者や免許を持たない人でも生活しやすい環境をつくることができる。これにより、公共交通の利用者も安定し、結果として交通サービスの維持につながると考えられる。地方都市では、高齢化が進む中で、自家用車を運転できなくなった人の移動手段をどのように確保するかが大きな課題だと思う。公共交通が不十分なままでは、通院や買い物といった日常生活にも支障が出てしまう。そのため、交通は「あると便利なもの」ではなく、「生活に不可欠な基盤」として、地域全体で支える必要がある。以上のことから、地方都市における交通問題を総合的に解決するためには、公共交通を生活インフラとして位置づけること、行政が主体的に関与し、人手や運行体制を支えること、都市構造や生活圏の見直しと交通政策を組み合わせることが重要なはずである。授業や他チームの発表を通して、交通問題は単独で解決できるものではなく、都市全体を考える中で取り組むべき課題であることを学んだ。今後は、公共交通を通じて、誰もが安心して暮らせる都市を実現していくことが求められると考える。また、交通政策を進める際には、住民の理解と協力も欠かせないと考える。どれだけ制度や仕組みを整えても、利用されなければ公共交通は成り立たないため、行政はなぜこの交通が必要なのかを分かりやすく伝え、地域住民が交通を自分たちの問題として考える機会を増やすことが重要だと思う。公共交通についての意識が地域全体に広がることで、持続可能な交通体系が実現すると考える。